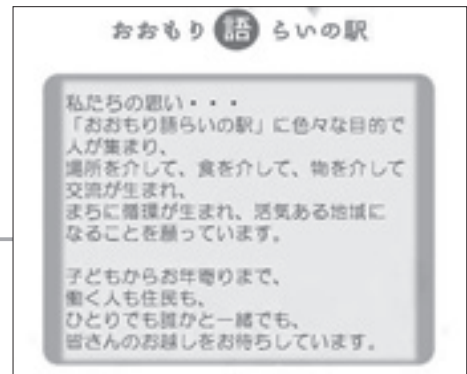


全世代対象対応型拠点 おおもり語らいの駅 事業

澤登 久雄 氏

社会医療法人財団 仁医会
 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長



要旨

2016（平成28）年10月に、もともとあった在宅にかかわる部署を再編し、「地域ささえあいセンター」を設立。「患者」ではなく「地域」を健康面で支えていく活動を本格的に開始した。この取り組みの拠点となる「おおもり語らいの駅」を2017（平成29）年5月にオープン。この場所で目指すのは、場所や物を介して、年代や性別、その他属性にかかわらず人が緩やかにつながることで、互助力を醸成させ、ひいては地域の活性化と地域力の向上につなげることである。

「当院を利用する患者のみに医療や看護、介護を提供するだけでは、一人ひとりが安心して暮らせるまちづくりは実現するものではなく、患者という枠にこだわらず、それらを提供することが医療機関として地域にできることなのではないか？」

「本来、病院はけがや病気になった人を治療する場所である。しかし、見方を変えれば病院というハコモノの中にはさまざまな分野の専門職がいる人的資源の宝庫と言える。その病院機能が、けがや病気を治療するだけの場ではなく、地域の健康を支える拠点になることはできないのだろうか…？」

これが私たちが考える全世代対象対応型コミュニティ『おおもり語らいの駅』のコンセプトです。

1. 地域包括支援センター・病院の現状

高齢者の総合相談窓口として設置された地域包括支援センターにおける相談件数は、年々増大しており、私たちの活動拠点である東京都大田区でも21か所ある地域包括支援センターで約10,000件の相談件数であったのが、2015（平成27）年度は13,500件、さらに増加傾向にある。

相談内容について考察すると、医療・介護などの相談にとどまらず、経済的な問題、住まいの問題、消費者被害等の相談、家族間の問題などが急増している。

特に家族間の問題では、介護と育児に同時に直面する世帯（いわゆる「ダブルケア」）や、障害を持つ子と要介護の親の世帯への支援が課題となっている。また、精神疾患患者やがん患者、難病疾患など、地域生活を送るうえで、福祉分野に加え保健・医療、就労などの分野にまたがって支援を必要とする世帯が増え、地域包括支

援センターや行政の高齢担当部署だけで問題を解決することが困難となっている現状がある。

また、医療を提供する病院でも同様の現状がある。増加する救急搬送されてくる独居、夫婦のみで暮らしている高齢者。このような人たちに私たち病院職員は、「どうしてこんな状態になるまで放っておいたのだろう」という思いを常に持っている。高齢者がこのような状態で搬送されてくる要因を分析すると3つの共通点がある。

- ①相談する人がいなかった
- ②勧めてくれる人がいなかった
- ③気づいてくれる人がいなかった

つまり、その人を取り巻く環境。特に、人との関わりによる要因があるということである。今後、急速に高齢化が進んでいくこのような大都市部において、地域包括支援センター・病院が制度の枠組みの中だけで、ま

るで「もぐらたたき」のように1つひとつの相談に対応しているだけでは、高齢者が安心して暮らせる地域などできない。まして、これから1人の高齢者が抱える問題が多問題化、複雑化していくことを考えると、個別対応すら一筋縄ではいかず、むずかしくなることは明らかである。

今こそ、地域住民と地域で働く医療・保健・福祉専門職が広くつながり合い、高齢者を支え合うシステムづくり、町づくりが求められている。

2.病院が地域にできることは???

病院で働く私たちが、たびたび感じるやりきれない思い…。

「どうしてこんな状態になるまで放っておいたんだろう…。もっと早く病院に来ていれば…。」専門職、サービスの支援を必要としているながらも、自分ではSOSの声を上げることができずに孤立する人たち。

このような支援を必要としている一人ひとりが抱える問題が多問題化、複雑化している。例えば、多問題を抱え、人との関わりを拒否している人の問題解決のために、たった1人の専門家が関わったところで、その扉を開くことはできないだろう。

「地域包括ケアシステム構築」に向けて、さまざまな見解があるだろうが、私たちは、住み慣れた地域で、たとえ要介護状態となったとしても、自分らしい暮らしを最期まで続けることを目指したいと考えている。「何かをしてあげる」のではなく、医療・保健・福祉専門職が地域に暮らす人たちとともに考え、選択し、決め合う。この決め合ったことについてそれぞれが役割を担う。この「役割を担う」ことが結果的に地域に暮らす人たちの「介護予防」につながっていく。

このように私たちは、「おおもり語らいの駅」の活動を通して、「地域全体で支援が必要な人を見守ることの重要性を地域の人たちに知ってもらうこと」、そして「この地域で医療・保健・福祉の専門職たちも一緒に手をつなぎ合い、さらにその事実を地域住民に広く伝えていくこと」が必要であると考えています。

孤立を予防するためには、高齢者自身が、元気なうちから地域とつながる意識を持ち、出来れば早い時期に地域包括支援センターともつながっていること、そして地域の中で身近な人の異変に気付き、専門機関へ早期につながる仕組みが必要です。

病院の役割は病気を治療すること…。でも、そこで働く私たち専門職の本来の役割は、『人がよりよく生きることを医療の面からサポートすること！』それを実現するために、「おおもり語らいの駅」を病院として誕生させました！この場を必要としている人に手を差しのべられるのは地域しかない。

専門職が必要なのにたどりつけない人々…。一人暮らしの高齢者、子育て中の母親、定年を迎えた男性…。そんな人たちがいろいろな目的で集まり、食を介して、物を介して、交流が生まれ、町に循環が生まれ、活気ある地域になることを目指しています！

私たち当院職員が目指す最終目標——それは、「SOSの声を自ら上げることのできない人たちに自分たち専門職の手が届くこと」です。

3.全世代対象対応型コミュニティ・スペース『おおもり語らいの駅』

社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院は、「当院を利用する患者のみに医療や看護、介護を提供するだけでは、一人ひとりが安心して暮らせるまちづくりは実現するものではなく、患者という枠にこだわらず、それらを提供することが医療機関として地域にできることなのではないか？」

そして、「本来、病院は「けがや病気になった人を治療する場所である。しかし、見方を変えれば病院というハコモノの中にはさまざまな分野の専門職がいる人的資源の宝庫と言える。その病院機能が、けがや病気を治療するだけの場ではなく、地域の健康を支える拠点になることはできないのだろうか…？」と思うに至った。

そこで、2016（平成28）年10月に、もともとあった在宅にかかわる部署を再編し、「地域ささえあいセンター」を設立。「患者」ではなく「地域」を健康面で支えていく活動を本格的に開始した。

その中心であり、拠点となる「おおもり語らいの駅」を2017（平成29）年5月にオープン。この場所で目指すのは、場所や物を介して、年代や性別、その他属性にかかわらず人が緩やかにつながることで、互助力を醸成させ、ひいては地域の活性化と地域力の向上につながることである（写真1、写真2）。

これまで培ってきたノウハウとネットワーク、地域力を活用し、世代と領域を超えて住民・地域を巻き込んだ事業を展開し、地域医療の中核となる病院が、その

総合力を基盤として全世代対象対応型地域包括ケアを具現化していく。おおもり語らいの駅には、地域ささえあいセンターの看護師・医療ソーシャルワーカーが常駐。日替わりで病院内専門職が地域住民との日常的なつながりを築いている。

おおもり語らいの駅オープンから1年が経過し、延べ参加者数は6,000人を超えた。参加者の世代別割合は、65歳以上が4割、20歳から64歳が3割(うち大部分が子を持つ親)、小・中・高校生、未就学児が3割とまさしく、全世代対象対応型コミュニティ・スペースとなり、地域住民にとっては医療を身近に感じ、早期に相談できる場となっている。(図1)



【写真1】



【写真2】

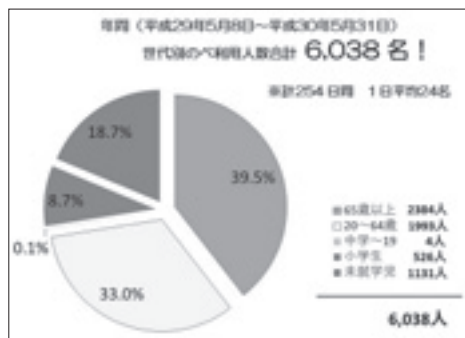


図1 おおもり語らいの駅参加者世代割合

4.人と人をつなぐ「おおもり語らいの駅」のひと工夫

おおもり語らいの駅を取り組むにあたって、意識していることがあります。それは、来る人たちにとって「自分だけの便利な場所ではない」ということです。安い金額のドリンク一杯注文すれば長時間滞在していい場所。自分たちにとって居心地のよい場所。そうになってしまうとつながった人同士の集いの場で完結してしまい、それ以上の広がりはない。この場を本当に必要としている人に届きません。

そうではなく、私たちが築こうとしている場。それが、「地域にとって必要な場所！」この場でつながり合った人たちが、共感を、世代を超えてつなぎ合いその広がりの中に、この場を本当に必要としている人に届けることにつながる。

このつながりの循環を生み出すための様々な工夫をしています。おおもり語らいの駅の過ごし方には大きく分けて二つの時間があります。また、この場を通して何かをしたいという「地域の中のやりたい！」を応援しています。

カフェタイム

- ◆風炉釜を囲んで&キッズスペースで好きな時間を過ごせます。
- ◆血圧など健康チェックができます。
- ◆「語らいの図書館」で本を通して誰かと交流できます。
- ◆「情報掲示板」には、地域のお得情報や、助け合いの情報が掲載されています。
- ◆看護師、社会福祉士などが、ご相談に応じます。

チャレンジタイム

- ◆新しい事、「歳だから…」「小さい子がいるから…」と諦めてしまったことへのチャレンジを応援します！
- ◆健康・病気・生活習慣など、より良く暮らすための講座を開催します。

一緒に関わってくれる方を歓迎します

- ◆語らいの駅では、お茶をしに来た方が、子どもたちの見守りをしたり、スタッフと一緒に清掃したりなど、「ついでのちょっとした手伝い」を歓迎します。
- ◆その他、「リハビリ中で社会復帰のきっかけにしたい」「自分にできることを探したい」など。地域や社会との繋がりのきっかけとして、定期的なボランティアを希望される方はご相談ください。

5. おおもり語らいの駅が目指すネットワークのカたち

医療・福祉の現場においてネットワークの必要性が叫ばれて久しい中、具体的なネットワークの形は未だ見えないのが現状です。そのため私たちは活動を開始するにあたって、ネットワークについての共通認識をもつことが必要であり、本会が目指すネットワーク(図2)を次のように具体化してきました。

【ネットワーク①「気づきのネットワーク」】

地域に暮らす高齢者と日常的につながりのある人たちが、普段の関係性の中で高齢者の異変に早期に気づくためのネットワークで、友人、ご近所同士、町会、老人会、商店街、銀行などがその構成者に当たる。

【ネットワーク②「対応のネットワーク」】

先に述べた「気づきのネットワーク」による地域での早期の気づきをもとに、包括的・継続的支援を実施していくためのネットワークと言える。具体的には、地域包括支援センターのほか、医療・介護・福祉の専門機関等がこれに当たる。

以上「気づきのネットワーク」と「対応のネットワーク」が各々有効に機能し、なおかつ2つのネットワーク間が有機的に連携できるシステムづくりが、私たちの目指すネットワークであり、目標なのです。(図2)

この「おおもり語らいの駅」という場を通して、牧田総合病院ができることは2つ！

- ①一人ひとりが自分のカラダのことを考える機会をつくる。
- ②あなたと専門職、あなたと「地域の誰か」がつながることができる機会をつくる。

おおもり語らいの駅でできることはここまで。そしてこの先は、ここにいる人たちが行動することを応援するだけ。そのために常にある場が「おおもり語らいの駅」です。

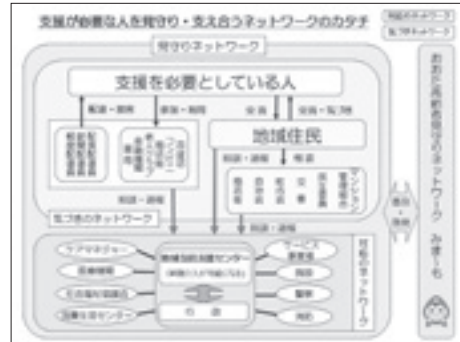


図2 私たちが考える「支援が必要な人を見守り・支え合うネットワークのカたち」

6. まとめ

『専門家というものは、より少ないものについて、さらに知識を増やしていく人のことであるという定義は、適切であり真実です』『メイヨー兄弟の格言集』(フレデリック・A. ウィリウス著 近代出版2004年)

この言葉からわかるように、本来、専門家とは視野が狭いもの。それでいい、だからこそ、自分の領域である専門性を極め、高みに到達することができる。しかし、今日のように少子高齢化が進むなかでは、機能分化された専門性を極めるだけで、果たして地域に暮らす人の生活や生命を最期まで支えることができるのか？

そこには限界がある。各専門組織・専門職種同士が互いに情報をきちんと共有でき、有機的に関わり合う仕組みが今、求められている。

時代は地域包括ケアシステムから地域共生社会へと向かっている。このシステムの更なる深化は、高齢者のみならず支援を必要とする人すべてが対象です。行政機関も「タテワリ」から「まるごと」への転換を求められている。私たちはこれからも病院として、「地域に暮らす人たちの健康を支える」ためにできることを考えて取り組んでいきます。